

卵を忘れかけた電車の中で

その日は、パン屋の留守番を頼まれていた。

古くからある店で、人気のロールパンのサンドイッチが看板商品だ。

ふわっとしたパンの香りが漂い、冷蔵庫にはレタス、ハム、ゆでたじゃがいもが並んでいた。

お客さんがやってくる。

「法事があるね。サンドイッチを 20 個、お願いできるかな？ 急ぎなんだ。あと 20 分ほどで出ないといけなくて。」

私は冷蔵庫の材料を確認し、すぐに調理にとりかかった。

レタスを洗い、ハムをスライスし、じゃがいもは軽く潰して混ぜ込む。味つけは、マヨネーズに少しバターを加えて、やさしいコクを出した。

でも……肝心のゆで卵を忘れていた。

気づいた瞬間、胸がざわめいた。

「あと 20 分もらえれば……」

私がそう告げると、男性は奥さんに話してくれた。奥さんは少し出発を遅らせることにしてくれた。

私は、大きな鍋に卵を 10 個入れたが、「もっと挟みたい」と思い直して、20 個に増やした。大鍋でぐつぐつと茹でていく。それは、まるで自分の内側のなにかを、ぐらぐらと煮詰めているような感じだった。

なぜか、鍋を持って電車に乗り込む。

座席にカセットコンロがあり、鍋を置く。湯気が立ちのぼる。

そのとき――

「先生！！」

明るい声が響いた。振り向くと、生徒たちが私を見つけて笑っていた。

「すごい偶然！」「どこ行くんですか？」

私は思わず笑って、彼らの輪に加わった。名前を呼ばれ、楽しく喋って、席を移動して……その瞬間、卵の存在が、意識から遠のいていた。

電車が駅に着き、同僚の先生が立ち上がった。

「じゃあ、ここで降りるわね」

私もつられて席を立った。

その時一目の前でドアが閉まった。

私は電車に残された。

そして、その瞬間、思い出した。卵！

鍋のもとに戻ると、驚きの光景が広がっていた。

私の大鍋から、ゆで卵が取り出され、数人の乗客が殻をむいて食べようとしている。

「それ、私のです！！」

私は叫び、卵を持っている人たちから一つずつ奪うように取り返した。

殻が半分剥けていたり、汚れていたりした卵もあった。

だけど、それでもまだ中身は無事だった。

私は卵たちを、怒り狂いながら取り返した。

その後、パン屋に戻り、卵をすべて丁寧に潰して、マヨネーズと混ぜ、塩コショウで味を調えた。

ふわふわのロールパンに、満遍なくはさんでいく。20個、すべてに心を込めて。

少し不完全な卵も、味にすれば、誰にもわからない。

大切なのは、戻ってきたということ。そして、自分の手で仕上げたということだった。

お客さんは、満足そうに言った。

「丁寧に作ってくれてありがとう。きっと、故人も喜ぶよ。」

私は、静かにほほ笑んだ。

私にしかできないこと。忘れかけても、思い出せること。

傷ついたままでも、取り戻して、整えて、届けることができる—それが、私の仕事だった。